

西米良村からの招待状



是非
お持ち帰り
ください

和をもって貴しとなす
そんな人の温かさが

村の魅力です



西米良村長 黒木定藏



西米良村は宮崎県の県中部を潤す一ツ瀬川の源流部に位置し、九州山脈の険しい山々に囲まれた人口約1200人の小さな村です。歴史をひも解くと、古くは日向の国に属していましたが、1501年以降、菊池氏によって400年間統治されてきました。「貧しさに耐えながらも文武を怠らず、礼節を重んじ、国家社会に尽くす」とした菊池氏の教えは、今も村民の心に受け継がれています。

現在、西米良村では交流人口促進による村の活性化を図るため、西米良温泉「ゆたくと」、百菜屋、小川作小屋などの観光施設の整備を進めています。また、日本初西米良型ワーキングホリデー制度を中心とした都市間交流事業の充実や、地域が活性化し自立するための道を検討するなど、村民みんなが元気で活力ある村を目指しています。

近年は道が良くなり村の外との行き来も便利になりましたが、それまでは他の地域との交流があまり盛んではありませんでした。けれども、外界から隔たれていたからこそ、この村には特有の歴史や文化が残っているのだと思います。

村人同士の「和」もそのひとつ。経済性だけで考えると西米良村は地理的に決して恵まれた土地ではありません。そのため村民は人とのつながりを大切にし、力を合わせないと暮らしていけないことを知っています。訪れた人を温かく迎え入れられるのも、そんな気質が影響しているのだと思います。西米良の魅力というところのままの自然や風土、歴史、文化などを想像しがちですが、村民の温かさもそこに加えたい。ぜひ一度、西米良にお越しいただき、そんな魅力を感じていただければ幸いです。

菊池家と米良の民

「結」の想い

西米良の歴史

かつて西米良村が属していた米良領は、菊池家が代々領主として治めていました。山間の静かな土地にしっかりと根を張った人々の暮らしを愛した領主でしたが、幕末から明治へ激動の時代が訪れます。そうなれば当然、この小さな領地も廃藩置県を行わなくてはなりません。その時、米良領最後の領主・菊池則忠公は領内の山林をすべての米良の民に与えました。

それからさらに時代は経ちます。則忠公の孫であり、数々の功績を残した武夫公が西米良へ帰村した際、村民たちは昔の恩返しにと屋敷を武夫氏に送りました。武夫公はそんな村民との深い交流の中、村でその生涯を終えたのです。

その心の交流は現在も途切れることなく、「菊池の殿様」と慕われた武夫公の屋敷には、毎年、武夫公の命日やお盆の頃になると多くの村民がお参りに訪れます。菊池の殿様と米良の人々は互いを思いやる心で今もお結ばれているのです。



菊池記念館

【住所】 宮崎県児湯郡西米良村大字村所 2-2

【電話】 0983-36-1020

菊池記念館 管理人
西脇サヨ子さん



暮らしに息づく 柚子の香り

柚子

稲作に適した平らな土地が少ないことから、

西米良では古くから山の傾斜地を利用した

柚子の栽培が行われてきました。

昼夜の寒暖差が大きい西米良の気候で育った柚子は、

香りが高く独特の風味があるのが特徴です。

地元では煮物や汁物、鍋料理はもとより、

入浴の友としても親しまれています。

柚子は古くから西米良を代表する農作物。汁物に入れたり、細く切って煮物に添えていただきます。

「柚子胡椒」「柚子みそ」「柚子アイス」など、柚子の風味を生かしたさまざまな加工品はお土産としても人気。

四季折々の食材を使った16皿
おがわ四季御膳 1,200円



平成の桃源郷 おがわ作小屋村
スタッフの皆さん



平成の桃源郷 おがわ作小屋村

【住所】宮崎県児湯郡西米良村
大字小川 254

【電話】0983-37-1240

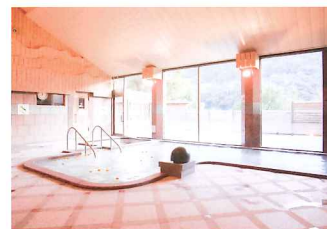
詳しくは、ホームページをご覧ください。
www.ogawa-sakugoya.com

山の葉音に包まれて ゆらりゆたくと

西米良温泉 ゆたくと

西米良の言葉で「ゆたくと」は「のんびり」の意味。

泉質はナトリウム炭酸水素塩温泉で「長寿の湯」「美人の湯」とも呼ばれています。木々に包まれた敷地内には温泉のほか、森林浴デッキや宿泊施設、食事処もあるので一日中「ゆたくと」できる場所です。



雄大な自然と溶け合う露天風呂はヒノキや岩などを使用。バリアフリーの家族風呂も備えています。



西米良の湯は、とろけるようななめらかさが魅力。季節によってゆず湯なども楽しめます。



西米良温泉 ゆたへと

【住所】宮崎県児湯郡西米良村大字村所 260-6

【電話】0983-41-4126

詳しくは、ホームページをご覧ください。
www.yutato.com



西米良温泉 ゆたへと 支配人
坂本哲也さん

村人と自然の力で蘇る 桜の名勝

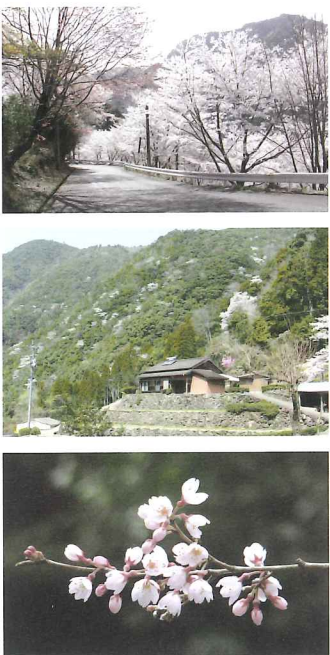
桜



せこぼ一ずの作小屋
黒木敬介さん

椎や樫などの雑木が茂る西米良の山肌には淡いピンク色をしたエドヒガンが姿を見せ始めるのは3月中旬ごろ。その昔、木炭の生産や杉などの植林の影響でその数を減らした時代もあった桜ですが、数年前から人工林を伐採した山のあちこちで花を咲かせるようになりました。

また、西米良村では10数年前から桜の植樹も行っており、エドヒガンやヤマザクラのほか、ソメイヨシノやヤエザクラ、カバザクラなど開花時期の異なる桜が5月初旬ぐらいいまで楽しめます。



国道219号線の杉安から村所の間には約30kmにわたって1000本の桜が植えられており、「桜ロード」と呼ばれています。見頃は例年3月下旬ごろから。

西米良村の魅力

風景も人も

石ころひとつをとつても

愛おしい



小河孝浩
写真家

カメラの技術を学んで、それなりに写せるようになると、なんとなくきれいな写真が撮れてしまいます。ところが住む人の息づかいや暮らしが見えてくる写真は、時間を掛けて土地に馴染まなければなかなか写りません。

村を離れていた頃は、目に見える美しさだけで写真を撮っていた気がします。帰郷して3年目を迎えると、繰り返される日々の風景や、見慣れた村人の表情に魅力を感じるようになりました。肩の力を抜いて自然体で日常を眺めてみると、今まで気が付かなかった普段の生活の中にこそ美しさが見えてきます。

自然が織りなす四季の表情や、人情味溢れる村人の暮らしに触れることで、日本人が忘れていているこの国の美しさが見えてくるかもしれません。現実の喧噪に疲れたら西米良において下さい。

1年の1/4は村を離れて撮影に出かけますが、都会で仕事を終えて西米良に帰ると、戦いの鎧を脱ぎ捨てて村人に戻れます。自分で行き先を決め、自分の歩幅と速度で人生を歩める。そんなところも西米良の魅力でしょうね。

小河孝浩（おがわ たかひろ）、1961年西米良村生まれ、在住 写真家

14歳の頃、初めてカメラを手にして撮ることに夢中になる。1980-2001年まで東京でコマース撮影を主に活動していたが、2001年西米良村に帰郷。現在も東京との仕事を続けながら、西米良村の人や風景にテーマを絞り継続的な発表を続けている。

【主な写真展】村の20代の若者45人を撮影した「西米良若者図鑑」展（宮崎、福岡）・西米良の四季を撮影した「空地風影」展（宮崎県立美術館、福岡）・5年前に撮影した若者のその後を8×10カメラで追った「5年後の若者図鑑」展（宮崎県立美術館）・現代の写真家が捉えた日本「Made in Japan」展（富士フィルムフォトサロン／東京、大阪）・村の夕景を撮影した作品が選出「APA award 2011」展・美しい日本賞入選「東京都写真美術館、大阪市立美術館」・西米良生まれの男性に村外から嫁いだ女性たちの夫婦、38組76人の肖像「結いの村」展（宮崎県立美術館、西米良村、諸塚村、高千穂町）

【著書】「おかえり 西米良写真日記」(石風社)「西米良神楽」(撮影)鉾脈社「結いの村」(石風社)

URL <http://www.ogawatakahiko.com/>



普段は緑で覆われた山肌に薄紅色の山桜が満開になった。
年に一週間ほど、存在を示すように咲き誇る。
標高差があるために、頂上から里まで同時に咲く事は珍しい。

Photo: Takahiro Ogawa



3月10日、菜の花が咲き、
桃の花にメジロが飛び交う季節に突然雪が降った。
かじかむ指でシャッターを押した後、
雪をすくって口に含むと、
微かに春の香りがした。

Photo: Takahiro Ogawa



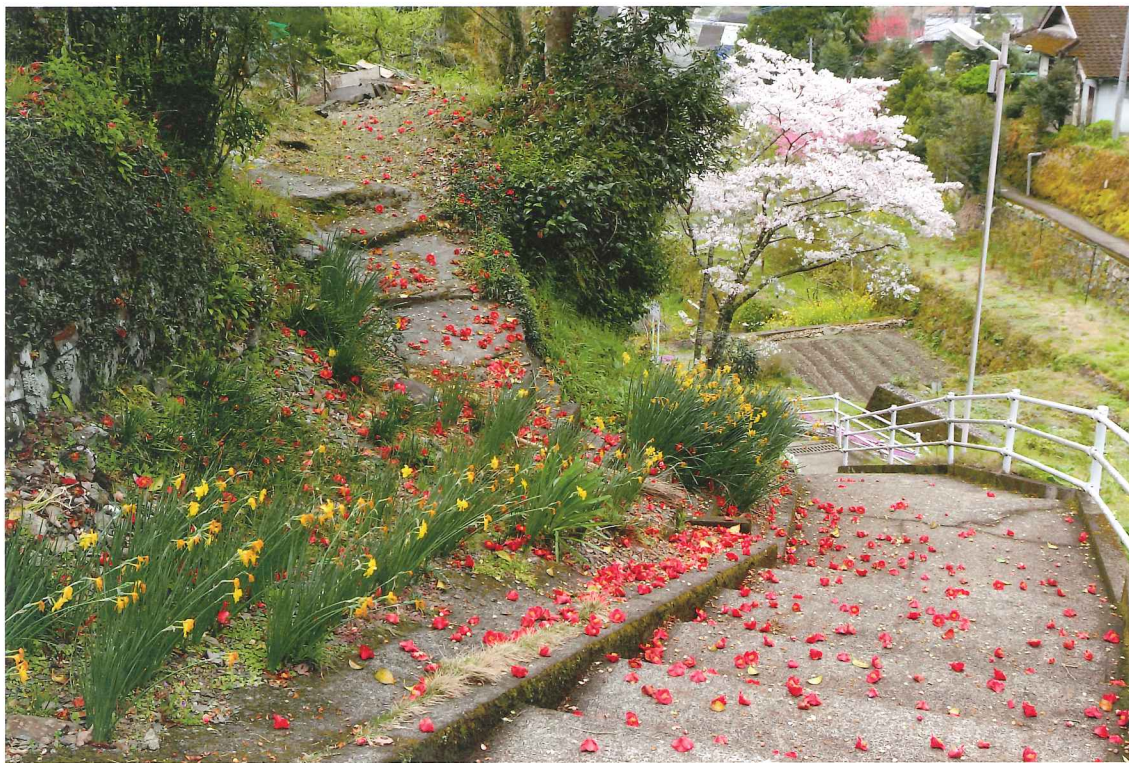
伯母の家に遊びに行くと暖かい茶の間で切り餅を作っている。
陽光で満たされた小さな茶の間がとても安心できる空間に思えた。
春待つ里の、時間が止まった瞬間。

Photo: Takahiro Ogawa



ゴールデンウィークを迎える頃、
独特の匂いが村を覆い、黄金色の椎の花が初夏を告げる。
これほどまでに自生していたのだと目を疑いたくなるほどの数だ。

Photo: Takahiro Ogawa



ふと振り返った瞬間にこの風景が飛び込んできた。
冬の水仙と椿が終わり、らせん状の階段の向こうでは、
次の季節を知らせる桜と菜の花が満開を迎えている。

Photo: Takahiro Ogawa



どんな人がバスを待つて、
どんな人がポストの手紙を取りにくるのだろう。

Photo: Takahiro Ogawa